

「ヨーロッパ・エコロジー経済学会に参加して～文理融合の試み」

レジリアンスプロジェクト 梅津千恵子

2007年6月5日から8日にかけてドイツのライプチヒにあるヘルムホルツ環境研究センター(Helmholtz-Centre for Environmental Research-UFZ)においてヨーロッパ・エコロジー経済学会(European Society for Ecological Economics)が開催された。私は2007年度大会テーマ「持続可能性のための自然科学と社会科学の融合」Integrating natural and social sciences for sustainability というテーマにとっても興味を持って参加した。本当にそんなことをやっているのだろうか？というのが私の率直な疑問であった。実際、文理融合を目指したことのある人なら「言うは易し行うは難し」を実感していると思うからである。エコロジー経済学会の参加者は環境哲学、政治、経済、社会学、法学、生態学、工学と環境に関連するありとあらゆる分野に渡り学問領域にとらわれないかなりオープンな学会という印象を受けた。日本では環境分野に関してはこの様な幅広い分野の研究者が集う学会が少ないのではないだろうか？融合の方法としては、経済モデルに生態的要素を組み込んだものから、社会的現象を生態モデルでシミュレーションしたもの、などが見られた。環境哲学が環境問題の現場に近いところに存在していること、NPO的小規模な環境研究所が非常に元気なのが印象的だった。会場となったヘルムホルツ環境研究センターは1991年創立の政府系研究所であり、早くから生態学と社会経済学の分野を共同で研究プロジェクトに参加させる取り組みを行って来た。スタッフは約800名。運営資金の9割をドイツ文科省が拠出している。ちなみにドイツでは2001年から2010年までの10年プロジェクトとして「社会生態研究 social-ecological research」を国が資金援助して実施しており、今回の大会ではその成果としての発表やセッションも多かった。



ヘルムホルツ環境研究センターの看板。生態システム分析(Ökosystemanalyse)と経済学(Ökonomie)が仲良く並んでいる。



ヘルムホルツ環境研究センター前景。敷地内には多くの政府系の研究機関がある。